

勝
目
梓

鮮
血
の
珊
瑚
礁



KADOKAWA NOVELS

二億円の宝石を狙う男達の野望が、
インド洋を血で染める！
ミステリーの野心作。

角川



カドカワパブルズ

昭和五十六年十一月一日初版発行
昭和五十七年四月二十日四版発行

著者 勝目梓

発行者 角川春樹

鮮血の珊瑚礁

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 株式会社大谷製本

装丁者 岡村元夫

発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見三丁目三番 振替東京三十一五三〇
電話東京三六三二七二大代表 二一〇三

Printed in Japan 落丁・乱丁本はお取替えいたします

0293-770601-0946(0)

勝
目
梓

鮮
血
の
珊
瑚
礁

KADOKAWA NOVELS

二億円の宝石を狙う男達の野望が、
インド洋を血で染める！
ミステリーの野心作。

アドルフ・シュツルツマン

●作者のことば

この長さの小説を、ほとんど一気に書きあげるといふ例は、
ぼくにしては珍らしい。

この作品はその珍らしい例に属する。

たぶん、スリランカという土地の魅力、旅情、そして作者のぼくが、
主人公の気分にかく導かれて、

筆がスムーズには、こんだせいたらうと思う。

略歴 一九三二年 東京生。小説現代新人賞受賞。ハードロマンの旗手として一躍流行作家となる。



カドカワパブリズ

昭和五十六年十一月一日初版発行
昭和五十七年四月二十日四版発行

著者 勝目梓

発行者 角川春樹

鮮血の珊瑚礁

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 株式会社大谷製本

装丁者 岡村元夫

発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二二三 振替東京三十一五〇八
電話東京三六二七二六代表 二一〇三

Printed in Japan 落丁・乱丁本はお取替えいたします

0293-770601-0946(0)

KADOKAWA NOVELS

鮮血の珊瑚礁 せんけつ さんご しょう

勝目梓

カバー絵・本文イラスト／石山みのる

目次

失踪

11

手紙

52

〈インド洋の星〉

90

死体

114

糸

158

隣室

193

午後一時十五分だった。

京都のホテル・センチュリーのメイドの一人が、一三三二号室を訪れた。部屋のメイクアップのためだった。ドアのノブには、睡眠中であることを示す札はかけられていなかった。メイドは一度だけ、チャイムを鳴らした。返事はなかった。マスターキーでドアが開けられた。

ツインの部屋だった。並んだベッドが見えるところまで来て、メイドは足を停めた。彼女は表情を変えた。全裸の女が、ベッドの一つに大の字に横たわっていた。肌の色が尋常ではなかった。顔の上に枕がのせてあった。腰の下のシャツが、濡れた跡の大きなしみをつけていた。陰毛がきれいに剃られていた。

メイドはベッドに歩み寄った。女の顔を覆っている枕をそっと上げてみた。女は眼を大きく見ひらいていた。眼球は動かなかった。喉の両側に紫色の鬱血があった。

メイドはフロントに電話で連絡をした。彼女はいくらか舌がもつれていた。

警察がやってきたのは、十分後だった。検屍が行なわれた。鑑識班が活動をはじめた。刑事たちの聞込みがすすめられた。

一三三二号室の客は男女の二名だった。二泊の予定になっていた。宿泊者カードに記入された男と女の住所は、

架空のものであることが、すぐに判った。氏名が、本名か偽名かは、その段階でははっきりしなかった。

その前夜、一三三二号室の男女が、たいへんに騒がしかったことが、両隣の宿泊客からの聞込みで判った。隣室の客は、一組は若い男女で、もう一組は老夫婦だった。彼らは口をそろえて、一三三二号室の客が、明らかに酒に酔っていたことと、二時間余りにわたって、セックスをしていた気配があったことを刑事に告げた。

解剖の結果、女の死因は頸^{くび}を手で絞められたための窒息死と判明した。

失踪

1

おれの子感はよくはずれる。

だが、たまに見事の中する場合もある。そういうときは、予感が湧いたとたんに、あ、こいつは当るな、というもう一つの予感がつづけてやってくる。

妹の奈保子なほこからの電話を受けたときもそうだった。

電話はその日の午後、おれの勤め先の中谷法律事務所なかやにかかってきた。おれは法律事務所なほこに勤めているが、弁護士じゃない。下働きだ。訴訟関係の調査の仕事をしている。刑事と興信所の仕事によく似ている。きついわりには陽の当らない仕事だ。ときには危い橋も渡る。調査のために人をペテンにかけることもする。みんな仕事のためだ。仕事というものは、ときに人間を変えてしまう。おれもおかげで眼つきがわるくなった。

相談したいことがあるから、夕方会ってほしい——奈保子は電話でそう言った。奈保子も会社から電話をかけてきたのだ。詳しいことは何も言わなかった。おれも訊きかなかった。午後六時半に、虎とらノ

門のピッコロという喫茶店で落合うことにして、電話を切った。

そのとき、予感が湧いた。奈保子の相談というのは、いい話じゃないな、とおれは思った。思ったとたんに、おれはその予感の中する、というもう一つの予感に見舞われていた。

奈保子は、おれとは七つちがいの二十七歳だ。一流と呼ばれているゼネラル商事に勤めている。おれたちには他に兄弟はいない。郷里に母一人を残してきている。同じ東京に暮しながら、住まいは別だ。おれは笹塚の小さなマンションに独り暮らし。奈保子は大森のアパートに住んでいる。

奈保子もまだ結婚していない。男も女も縁遠い家系らしい。だが、奈保子には好きな男がいて、どうやら結婚の約束をしているようすだ。それらしいことをにおわしたことがあった。

奈保子の電話の音が、いつものように明るかったら、おれは彼女の相談の内容について、別の予感を抱いていただろう。奈保子は受話器に沈んだ声を送ってよこしたのだ。

中谷法律事務所は溜池にある。ゼネラル商事の本社は、田村町の交差点に近い。それでおれと奈保子は、虎ノ門のピッコロを落合う場所にきめたのだ。

六時半にピッコロに行くと、奈保子はまだ来ていなかった。おれはコーヒーを頼んで、途中で買ってきた夕刊をひろげた。退屈な記事が並んでいた。二週間前に、京都のホテルで殺されていた女の身許が、ようやく判った、という記事が小さく出ていた。川野明代という名の二十九歳のホステスだったという。

おれは前に新聞で読んで知った、その事件を思い出した。猟奇事件というような報道のされ方をしていた。女の陰毛が丹念に剃られており、内股には、たばこの火かなにかを押しつけたらしい火傷の

跡があった、ということだった。

夕刊を読み終えても、奈保子は現れなかった。おれはコーヒーをすすりながら、たばこを二本灰にした。店は混んでいた。待合せらしい客が多かった。窓の外に宵闇よいぢみのひろがりはじめを通りが見えた。車と人の往来がはげしかった。みんな気ぜわしそうに歩いていった。おれは退屈をおぼえはじめた。陰毛を剃られ、妙なところに火傷を負って殺された女も、生きているときは、やはり気ぜわしく歩き、あるいは喫茶店で人を待ったり、待たせたりしたのでらうな——おれはそういう、どうでもいいようなことを、ちらと頭に浮べたりした。

三本目のたばこに火をつけたとき、店の入口に奈保子が姿を見せた。奈保子はレジの前に立って、店内を見まわしていた。すこし眼を細くしていたのは、近視のせいだ。おれは手を上げて席を示してやろうか、と思ったが、やめにした。そこまで親切にしてやることはない。二十分近くも遅れた罰だ。近視の眼をせいぜい細くして、兄貴の姿を探せ——。おれには、そういうけちな小意地のわるいところがある。相手が妹でなくてもだ。

奈保子は、おれの姿を眼にとめると、小さくうなづくようにして、席にやってきた。急に課長に仕事を頼まれたのだ、と奈保子は遅れた理由を説明して、詫わびた。

「相談でなんだい？」

おれは早速に話を促した。

「うん……」

奈保子は言つて、バッグをあけ、たばこを取り出して指にはさんだ。ウェイトレスが注文を聞きに

やってきた。奈保子はアイリッシュコーヒーを頼んだ。たばこに火をつけて煙を吐いた。

おれは妙な気分だった。奈保子は、ついこのあいだまで、丸々とふとって頬ほぺたを赤くしていた中学生だったような気がする。それがいまではたばこをふかして、アイリッシュコーヒーなんぞを飲むというのだ。アルコールの入ったコーヒートを宵の口から飲む女というのは、どうも不幸を背負っている、というふうに思えてしまう。

「元気がないじゃないか。どうした？」

「そうなのよ。元気がないの」

「失恋か？」

「ならいいんだけど、彼が妙なことになってるの」

「彼？」

「宮内敦みやうちあつしさん。会社の人なの」

「奈保子が結婚するかもしれないっていったのは、その男か？」

「そう。いい人よ。いまスリランカに出張中なんだけど、向うで行方がわからなくなってるのよ」

「相談というのは、そのことか？」

「そうなの。帰国予定が過ぎて、今日で二日になるんだけど、帰ってこないの」

「行方がわからないって言ったな？」

「向うのホテルはチェックアウトしてるんだって。でも連絡がとれないらしいの」

「スリランカには何しに行ったんだ？」

「宝石の買付よ。宮内さんはゼネラル商事で貴金属の輸入の仕事をしてるから、スリランカには何度も行ってるの」

「それで？」

「今度は、二億円とかの大きなスターサファイアを買付けているはずなんだって。そのスターサファイアを、宮内さんが持って帰ってくるのになつてたらしいの」

「それが、予定を過ぎても帰国しないってわけか」

「会社では、事故があつたんじゃないかということで、極秘に宮内さんの行方を探しはじめてるらしいの」

「どうして極秘なんだい？」

「うん……」

奈保子は言いよどんで、うつむいた。

「二億円の宝石がからんでるからか？」

「それもあつらしいの。それに、大きな会社というのは、社員の事故とか事件を隠したがるでしょう？」

「しかし、事件といつたつて、帰国が二日遅れてるぐらいで……」

「これはあたしの推測なんだけど、会社の上のほうには、宮内さんがなんらかの理由で、二億円のスターサファイアを持って、わざと姿をくらましたのじゃないかって、疑ってる人もいるらしいの。あたし、情なくって」